

連載コラム



みずき野と
その周辺の
植物と昆虫

第 75 回

源氏物語の植物たち (1)



もとよし ふさお
本吉 総男

2024 年 9 月

NHKの大河ドラマ「光る君へ」の主人公は、不朽の名作『源氏物語』を著した紫式部です。それにちなんで、岩波文庫で『源氏物語』を再読しています。原文ですが注釈がよく、比較的読みやすく編集されています。今回から『源氏物語』に現れる植物を何回かに分けて紹介したいと思います。源氏物語に現れる植物の大部分は、紫式部や平安貴族たちに馴染み深い植物だろうと思います。千年以上を経てなお、紫式部たちと私たちが好みを共有する植物にはどのようなものがあるでしょうか。

キリ

冒頭の「桐壺」の巻は次のように始まります。

「いずれの御時にか女御・更衣、あまたさぶらひける中に、いと、やむごとなき
 際にはあらぬが、優れて時めき給ふ、ありけり。」

このお方は、時の帝からことさらに寵愛を受けています。この「優れて時めき給ふ」お方のお局は、淑景舎で、桐が植えてあるため通称「桐壺」と呼ばれています。帝のあまりのご寵愛に、弘徽殿女御（帝の妻で春宮（皇太子のこ）の母）をはじめ、多くの女御・更衣から妬まれています。それはさておき、帝と桐壺更衣との間に生まれたのが源氏物語の主人公、光源氏です。そこでまずこの物語の発端となる植物、キリを取り上げましょう。

キリの原産地はどこかはっきりしません。

中国の揚子江に原産し、古い時代に日本にもたらされたという説、原産地は朝鮮半島の東方に位置する鬱陵島という説、日本にもともと野生していたとする説があります（週刊朝日百科「世界の植物」15号）。キリは高さ10メートル前後の落葉高木ですが、成長が早く、木材としては大変軽く、しかも丈夫で、燃えにくく、家具、室内装飾、彫刻、楽器などの材料としてすぐれた樹木です。キリは花も美しく、開花期（5月）の高貴な姿が印象的です。以前の分類ではゴマノハグサ科の木本植物とされていましたが、現在はキリ科に分類されています。



キリ 5月上旬 守谷市土塔森林公園

キリは花も美しく、開花期（5月）の高貴な姿が印象的です。以前の分類ではゴマノハグサ科の木本植物とされていましたが、現在はキリ科に分類されています。

ハギ

きりつぼのかうい みかど によろご かうい ねた
 桐壺更衣は、子をなして 帝 の寵愛を一身に受け、多くの女御・更衣からの妬みはますます
 ひどくなり、口では言い表せぬほどのいじめを受けます。そのため桐壺更衣はやつれ果てて
 病に倒れます。それでも みかど かうい
 帝 は寵愛のあまり更衣が母のいる実家に戻ることをなかなか許し
 ませんでした。祈禱を受けるためにやむなく実家に戻らせます。やがて実家からの使者は
 かうい みかど みかど
 更衣が亡くなったことを 帝 に告げます。帝 の悲しみはいかばかりでしょうか。後のことにな
 りますが みかど ゆげひ みやうぶ ふみ かうい
 帝 は靱負の命婦というものに、自らの文を託して更衣の母のもとに届けさせます。
 その文の中に次のように書かれています。

宮城野の 露吹きむすぶ 風の音に 小萩がもとを 思ひこそやれ

(宮中を吹く風の音にも涙が出るほどに、若宮の身が案じられます)

注:宮城野は宮城で宮中の意を表す。露は涙、小萩は若宮になぞらえる。

ハギという名はハギ類の総称として使われています。ハギと呼ばれる植物には、ヤマハギ(分布:北海道、四国、九州、朝鮮半島、中国)、ツクシハギ(分布:本州、四国、九州)、ニシキハギ(分布:本州中部以西、四国、九州、沖縄、朝鮮半島、中国)、マルバハギ(分布:本州、四国、九州、朝鮮半島、中国)その他数種あります。花の形はどれもよく似ていますが、葉の形には多少の違いがあります。歌の中の萩はどの種かはっきりしません。みずき野では、ヤマハギとマルバハギが見られました。



ヤマハギ 8月中旬 みずき野さくらの杜公園



マルバハギ 8月中旬 みずき野さくらの杜公園

上記の歌の中の若宮はのちの光源氏。帝みかどと弘徽殿女御こきでんのようご(後述)との間に生まれた子が春宮とうぐう(皇太子のこと)となっていることから、将来のトラブルをおもんばかった帝みかどが若宮の幸福を願い、七歳の折に、臣下である源氏としました。

アオイ

光源氏は、12歳で元服し、左大臣あふひの娘、葵あふひと結婚します。しかし源氏はひとえに藤壺女御ふじつぽにようご(後述)に恋心を抱いていて、葵あふひが正妻であるにも関わらず、その元を訪れることは多くありません。

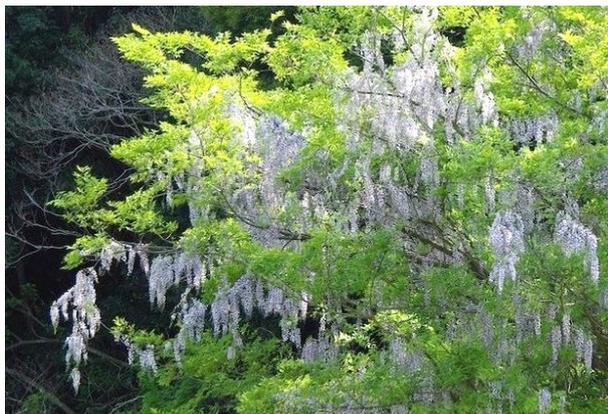
ここでいう葵あふひはフタバアオイにちなむ名かと思います。フタバアオイは上賀茂神社と下賀茂神社の神紋となっており、葵祭はこの2つの神社の大祭です。フタバアオイ 葵祭、フタバアオイ、賀茂神社の神紋については、「[京都の伝統・文化と自然:フタバアオイ](#)」(PDF)を参照してください。フタバアオイはみずき野やその周辺にはないようです。

注:フタバアオイ、カンアオイ、ウスバサイシンなどはアオイ科に属すると思われがちですが、ウマノスズクサ科と聞いて少し奇異に感じる人もいるかも知れません。アオイ科の植物にはワタ、オクラ、トロアオイ。タチアオイなどがあります。

フジ

藤壺ふじつぽ(正式の名称は飛香舎ひぎやうしゃ)の庭にはフジが植えてあります。藤壺女御ふじつぽにようご(のちの藤壺中宮ふじつぽのちゆうぐう)はここに住んでいます。亡くなった桐壺更衣きりつぽのかういによく似ていることから、帝みかどに特別な寵愛を受け、源氏も母に似ていると聞き、心を惹かれます。帝みかどは寵愛する源氏が幼い頃から藤壺ふじつぽに近づくことを許します。源氏は、藤壺ふじつぽを慕うあまり、帝みかどの寵愛する藤壺女御ふじつぽにようごに内通し、藤壺ふじつぽは源氏の子れいぜんてい(のちの冷泉帝みかど)を産みます(「若紫」の巻)。帝みかどは生涯、自分の子と信じて疑いませんが、藤壺ふじつぽの悩みは深まりゆくばかりです。

フジはマメ科のつる性の落葉高木で、花は5月に咲きます。本州、四国、九州に分布する日本固有種。フジはみずき野周辺のところどころに見られます。みずき野には、あんず公園、さくらんぼ公園、郷州小学校の校庭などに藤棚があります。



フジ(紫) 4月下旬 守谷市本町地区



フジ(白) 5月上旬 取手市貝塚地区



フジの実 5月上旬 守谷市本町地区



藤棚のフジ 4月中旬 みずき野あんず公園
(写真は北川道子氏より提供)

ここで、^{みかど}帝の先妻、^{こきでんのようご}弘徽殿女御について述べおきましょう。^{みかど}帝と^{こきでんのようご}弘徽殿女御の間には子がおり、^{みかど}帝と^{ふじつぼ}藤壺の子として育てられた若君より先に生まれているため、^{とうぐう}春宮(皇太子のこと)となります。のちの^{すぎくてい}朱雀帝です。しかし^{みかど}帝の愛情はもっぱら^{きりつぼのかうい}桐壺更衣、のちに^{ふじつぼのようご}藤壺女御に向けられているため、両者とも、また^{きりつぼ}桐壺の子である^{こきでんのようご}光源氏も弘徽殿女御に激しく恨まれています。

ナデシコ

^{きりつぼ}「桐壺」に続く^{ははきぎ}「笏木」では源氏はすでに17歳になっています。この巻は前半と後半のテーマが異なり、前半は「雨夜の品定め」と称されています。

雨が降る宵、光源氏の宿直所（高位の人が宮中で宿泊する所）に、頭中将、左馬頭、藤式部丞が集まり、いずれも好き者（いろ好み）でそれぞれ女遍歴、関わった女性の評価を語ります。

「雨夜の品定め」の中に、頭中将へある女から送られてきた歌と、頭中将からの返しの歌が載っています。

女「山がつの垣は 荒るとも をりをりに あはれはかけよ 撫子の露」
 頭中将「咲きまじる 花はいつれとわかねども なほ常夏に しくものぞなき」

女の歌では「山がつ」を自分に、撫子を頭中将との間に生まれた子に、露を頭中将に当てはめています。頭中将の歌では女を「常夏」と呼んでいます。「常夏」もナデシコのことですが、女が子を撫子になぞらえたので、女をナデシコの別名の常夏と呼んだのです。なお、常夏が産んだ子のはちに「玉鬘」と呼ばれる女性です。



参考写真

カワラナデシコ 5月下旬 神代植物公園

「箒木」の後半では、源氏が「空蟬」という女性に会い、恋愛します。しかし、空蟬は夫への貞操から源氏を避けようとし、巻名の「箒木」は、信濃の藪原にあり、遠くからは見えるのに、近づくと見えなくなると伝えられる伝説の木のこと、空蟬の心に例えられたものです。この話は次巻「空蟬」に続きます。

セミの抜け殻

「箒木」に続く「空蟬」の巻は、「箒木」の後半に続く物語です。なぜこの巻の主人公が「空蟬」と呼ばれているかは、源氏が好き心から、この女性の部屋に忍び込んだことに寝ていた女性は気づいて、すずし（薄い絹織物）だけを着たまま逃れることに由来します。脱ぎ捨ててあったのは一枚の小袷（薄衣の一種）でした。源氏は仕方なく、この薄衣を抱いて寝ます。空蟬は伊予介という伊予国の次官の妻で、源氏に惹かれながらも貞操を守ったのでした。

うつせみ
空蟬とは蟬の抜け殻のことで、^{うつせみ}空蟬の名は小袷を脱いで、^{こうちき}源氏から逃れたことから、蟬の抜け殻に例えられた名ですが、蟬の抜け殻はあまり美しいものではありません。



ニイニゼミ 7月中旬
みずき野さくらの杜公園



ニイニゼミの空蟬(抜け殻)
7月中旬 みずき野さくらの杜公園



アブラゼミ 7月下旬
みずき野さくらの杜公園



アブラゼミの空蟬(抜け殻)
1月上旬 みずき野さくらの杜公園

オギ

「^{うつせみ}空蟬」の巻の中に登場し、源氏がふとしたことから関係を結ぶ「^{のきばのおぎ}軒端萩」と呼ばれる若い女性で、その呼び名は「^{ゆうがお}夕顔」の巻の中にある歌によっています。

源氏「ほのかにも 軒端の萩を結ばずば 露のかごとを 何にかけまし」

(ほんの少しでも契ったのでないならば、わずかな恨みをどうして言えましょうか)

注: この歌は、^{のきばのおぎ}軒端萩が^{くろうと}蔵人の少将を夫としたことを源氏知って作ったものです。



オギ 10月上旬 守谷市本町地区

オギの穂先 オギ
10月上旬 守谷市本町地区

ユウガオ

源氏は夕顔ユウガオのつるが垣根にからんでいる家に美しい女性（「夕顔ゆうがお」と呼ぶ）を見つけ、そこに住んで主人である夕顔ゆうがおの世話をする女たちを避けるため、夕顔ゆうがおを人目につかぬ館やかたに移します。ところが、この館やかたに女の姿をした物怪もののけが現れ、寝ていた夕顔ゆうがおを呪い殺してしまいます。源氏は悲しみからしばらく立ち直れません。のちに、夕顔ゆうがおは「雨夜の品定め」の中で、頭中どうのちゆうじょう将とこなつが語った「常夏」であることがわかります。

夏の夕方に白い合弁の花が開き、朝にはしぼんでしまうのでユウガオと呼びます。ユウガオはアフリカ、アジア熱帯に原産するウリ科の植物で、日本でも古くから栽培されていますが、渡来の時期は不明です。実は巨大で秋に見られます。現在は、かんぴょうの材料として栽培されていますが、花を鑑賞するための品種ユウガオもあるようです。夕顔ゆうがおの実みは不恰好なので、清少納言は枕草子の中で、次のように述べています。

「夕顔ユウガオは、花のかたちも朝顔に似て、いひつづけたるに、いとをかしかりぬべき
花の姿みに、實みのありさまこそ、いとくちをしけれ」

じつ
実は私はユウガオの花を見たことがありません。栃木県でユウガオの実みからかんぴょうを作る工程を見学したことはあります。

ユウガオについては、[「夕闇で優雅に咲く花『ユウガオ』」](#)を参照してください。ユウガオはみずき野やその周辺には見られません。